

図書館だより

市立図書館



第61回『読書週間』

期間 10月27日(土)～11月9日(金)
標語 『君と読みたい本がある。』

市立図書館では、読書週間にあわせて次の教室等を計画しました。たくさんの方の参加をお待ちしています。

対象 小中学生と保護者
※参加費無料(ハサミをご持参ください)

☆絵本作り教室

(中央公民館と共催事業)

日時 11月10日(土)

9時30分～12時

場所 市立中央公民館

講師 吉村美恵子先生

☆ワイド紙芝居

紙芝居座『へんしも』

(ちよつとしかけがあるよ)

日時 11月24日(土)

10時45分～11時20分

場所 市立図書館

おすすめの1冊



火のみち

(作:乃南アサ)

人に知られたくない過去のある南部次郎。自分でも押さえようのない激情に苦しむ。焼き物との出会い、汝官窯…白磁器との出会いは運命的だ。一途に自分を捧げて、汝官窯に打ち込む彼は幸せだったはずだ。彼の情熱に、人生に引き込まれるように一気に読んだ。

おばちゃん (山田)

☆「読み聞かせ絵本」の展示(本館、物部分館)
※香北分館では、県立図書館からお借りした「読み聞かせ絵本62冊」を展示。

☆読書クイズ(全館)

新着本の紹介 (市立図書館)

〔大人向け〕

▽湿地帯(宮尾登美子)▽

何のために働くのか(北尾吉孝)▽おひとりさまの老後(上野千鶴子)▽ぼくには数字が風景に見える(ダニエル・タメット)▽新十戒(シドニー・シェルダン)

▽「世界の古代遺跡」空から見る驚異の歴史(アンリ・スティルラン)

〔子ども向け〕

▽トコトコさんぽ(長野ヒデ子)▽ことわざ絵本(西本鶏介)▽地球のなぜ?(友田好文監修)▽小さな犬(町田尚子)▽ぼくもわたしも

気象予報士シリーズ(森田正光)▽パニクリさんとかぼす君(ワヤン浜野)▽おじいさんならできる(フィ

ビ・ギルマン)

スポーツニュース

たすなど活躍しました。

〔大会結果〕(敬称略)

※香美市関係のみ掲載

◆シニアの部

・団体戦

準優勝 〓 オールT (吉本二男、吉本郡三、青木延雄)

・個人戦 (ティール合戦)

優勝 〓 青木延雄

◆フリーの部

・団体戦

第三位 〓 香北スルアル (西本恭久、川村周作、公文正志)

・個人戦 (ティール合戦)

準優勝 〓 西本恭久

県民スポーツ

フェスティバル2007

ペタンクで入賞

九月三十日、「県民スポーツフェスティバル2007」のペタンク競技が香北グラウンドで開催されました。シニアの部とフリーの部に分かれて行われた競技では、地元の香美市内の団体・個人が優勝や入賞を果



シニアの部団体準優勝「オールT」



香美市文芸

【短歌】

楠瀬 兵五郎 選

北の森の榎えのき一本に遮られ音のみ聞ゆ佐岡の花火

門田 きみ

早苗、稲束、薪を背負ひて若かりき今は尺取虫か杖に喘ぐも

大岸由起子

生見浜サーフィン遠目に鱧きすを釣りわが子と並び磯に飯食う

高野 和一

喘息を綴る日記に秀歌あり母の憧れしサンケイ歌壇

森本 幸美

義理意識持たぬ心を云ひ合ひて嫂あによめが手作りの寿司をいただく

小原 子川

銀杏ぎんなんのすずなりになりて枝重し台風多かりし夏なりしかど

小野寺朱実

シャーシャーと鍛冶屋に負けぬ蝉の声台風五号夕べ接近

伊藤 清子

父母の教え守つて生くる日々吾が行く路には一筋の光見えたり

高田 清子

仄暗ほのき氏神の杜もりに響きいる法師蟬の声コンバインの音

佐々木真里

窓つたう雨の雫を数えつつ今のわたしは満ちたりており

古谷 由美

明日咲く花白くつぼみて酔芙蓉うす桃色に八重のゆたかさ

都築 初代

一缶のビールも吾よりとりあげる検査の結果を記すカルテは

小野川恵仁

この今の時を惜まむ夕かげに黄の花ひらく狭間田の道

小松もとみ

庭すみに白々穂に立つノシランに気づきて酷暑をくつろぐ夕べ

坂上のぶ子

回収の割箸使った紙漉きに輝く子等の中に吾があり

宮地 亀好

ひと筋となりて行くもの反るもの日照りの下に蟻らひたすら

佐竹 玲子

泥の色いつまでも退かぬ物部川鴨の親子の健気なるさま

古川 安子

事件事故又かと慣らされゆくように思えてならぬ命の尊さ

横田直加子

建ち並ぶ介護療養棟の路辺ふさわしき花すべりひゆ盛る

尾立 かよ

この日頃少し沈みしわが心どうしようもなし米寿まで生きて

山崎 緑

リハビリを終えて帰れば先づ夫に告げて言えども返事なき常

竹村 松子

それぞれのマストは友に支えられ登りゆく子ら胸あつくする

竹村 稔美

末世でもこの子の母になりたしと願いをかける星祭りの夜

山崎 貴子

豊かなる自然の恵みさわやかにのどし涼し萩野の清水

公文 千恵

今日ひと日齡としを忘れるフラダンスリズムに乗りて心充ちゆく

谷内 務

明るくて声の大きい夫でした墓所いっばいに曼珠沙華咲く

吉本 悦子

辛抱といふ言葉思ひをりコンビニに深夜子を連れてゐる母一人

大石 綏子

月蝕を見たしと暫し待ちをれば神秘なる月庭木の梢に

門田 明子

戦争を語る人減り改憲と戦後六十二年の暑き夏ゆく

北村佐喜子

夕暮れて山畑を打つわれの背に早う帰れと梟ふくろうの鳴く

公文 正子

わが畑にゑのころ草の生ひ繁り美しく露に光るときあり

高橋 章

しらすぎの飛びゆく群は乱れなく迷ひ来しごと山の端に消ゆ

高橋 弘子

幾駅かメール打ち継ぎをりし女前の座席に声たて笑ふ

竹村 咲子

真夏日のなかにさゆらぐ百日紅人は猛暑に悲鳴をあげる

出原 久子

触れそうになれば葉裏に身を隠す虫のやからは吾が手に負えず

松中 賀代

歌会にて学びゆくべしあこがれてひたすらに聴く評者のことば

大石さち子

一年中で一番苦しい夏来るしつかり生きよとわが身にさとす

山崎 富美

不自由な身を佗ぶ家に訪れし可愛いひ孫の声に和みぬ

門脇 千代

職業はリストラの無き百姓と話して青年明るく笑ふ

山下 弓枝

歩行器具にすがりて歩む畦道は遠き日夫と草刈りし道

浜田 常子

われもこう今は姿をひそめたり手を加えたるわが実家さとの道

森本真理子

友もわれも耳遠くなりだんだんに声を高めて最後は笑ふ

有沢 泰子

法師蟬遅れて来る十月の遠慮がちなる最後のマリア

中西 敏子

無人駅に姉を送りて帰らむと遠まはりするコスモスの路

長谷 千鶴

まるまると育ちて二百五十日もしもしはと聞けば拳を耳に

法光院俊子

山手には草焼く煙空澄み匂ひにさとき犬と連れだつ

楠瀬兵五郎

※俳句・短歌の応募は、企画課内広報委員会事務局まで。